

RISTEXの数々の領域・プログラムのマネジメントに携わり、研究開発成果の実装に向けた多数のプロジェクトを後押ししてきた川北秀人が考える「研究開発と人材育成の両立」に関する備えとは何か。社会科学の研究開発ならではの難しさも踏まえながら、経験に裏付けされた実践に繋がるヒントをお届けします。

社会課題解決に挑む 研究開発に求められる、 人材開発への備え

自然科学の研究開発による成果が、製造業者によって製品となり市場で売買されることで価値をもたらすのと同様に、社会科学の研究開発成果も、誰かがサービスとして社会にもたらすことによって価値を実現します。ただ、その研究のテーマが深刻な社会課題の解決であれば、既存の市場や地域における担い手や行政によって、すぐに活用、または実装されるとは限りません。社会の変化に応じて課題の状況も変化する中で、個々人が置かれた状況の多様さ・複雑さを踏まえた応用も求められます。社会課題の解決に挑むには、研究開発だけでなく継続的に実践またはサービス提供するために、事業開発と人材開発の積み重ねが不可欠になってきます。積み重ねといっても、開発された時点での手法・体制をただ継続するという線形的な積み重ねではなく、規模や機能について段階的な拡充が必要になります。このため、研究成果の定着・実装に際して、筆者は研究代表者な



どに「対象者数の規模(このサービスや取り組みを要する対象者数は何人ぐらいか?)」と「その規模の対象者を日常的に支える体制(どういう役職やどんな技能を持つ人が担う必要があるか?)」について聞き、設計を考えていただくように促しています。

製品を市場に送り出すためには、原材料調達から生産、輸送、販売、整備までの体制整備が求められ、その規模が大きいほど求められる投資も大きくなります。一方、社会課題の解決は、市場はもとより、行政も即応してくれるとは言い難いです。このため、サービスや課題解決のための取り組みを、それを必要とする人々のものに

届けるには、その機会(「現場」)の担い手のみならず、現場の担い手を育てる側の人間も、そして、現場での実践にもとづく工夫や課題の共有を通じた継続的な学びあいの機会づくりも不可欠となります。「学びあう」担い手のコミュニティができれば、人材育成の基礎となるテキストも、研究者だけでなく実践者と共に更新・拡充していくことができるようになります。

このように、社会課題の解決に挑む研究者にとって、研究開発成果の定着・実装期間とは、その取り組みを必要とする規模を概算し、その担い方と、担い手の育て方についても、仮説を検証する期間であるといえます。

社会実装の手引き 研究開発成果を社会に届ける仕掛け

JST-RISTEX [研究開発成果実装支援プログラム] = 編

川北が長年マネジメントに携わってきた RISTEX の実装支援プログラム。子ども、高齢者・弱者支援、環境問題など生活に深くかかわる 48 の実例とともに「社会実装を知る一冊」。2019年6月刊・ISBN978-4-87502-509-2

